

本月の遺教経講話では、世尊の戲論に対する誠いしましめを頂戴した。無駄な議論をしたり、悪言に自他を損ねたりすることを誡いられたのである。

万世に人を救う世尊の證まことも語ことばとなつて現わされるし、悪逆人を刺す毒針も語ことばとして現わされる。

その人の精神生活の深さより深いことばは出て来ない。

ことばを受け取るものは心である。したがってどんな尊いことを聞かしても、精神生活の程度しか、ことばの意味を受け取ることには出来ない。

であるから、つまらぬ者はつまらぬことを言い、つまらぬことだけを受け取つてこの世をおわる。

み法を聞いていると、ことばに対する感覚が深まつて来る。み法の広まつていない地方では、何を言つても蛙の面に水のようにである。

念仏の人は、ことばに対して深くして純な感受性を持つ。それ故に世尊や聖人のみ言ことに対して、何よりも深甚な感銘を持つのである。

「天親菩薩のみことをも 鸞師ときのべたまはずば

他力広大威徳の 心行いかでかさとりまし。

論主の一心ととけるをば 曇鸞大師のみことには

煩惱成就のわれらが 他力の信とのべたもう。」

天親菩薩から頂くものもみ言ことであり、曇鸞大師から頂くものもみ言ことである。

眞実のみ言を頂戴して歡ぶころ、信心である。

聖人は曇鸞大師からみ言を頂かれた。曇鸞大師は天親菩薩から頂かれ、天親菩薩は更に世尊から頂かれた。我等はこうした流れを通して聖人から尊いみ言を頂くのである。

こうしたお方のお言葉は、久遠の大悲の親心から流れたものであり、人格から人格の上を伝えられて、行く／＼尊い自覚と救いを成就しながら、それらの人の生活の事実となつて一貫して来た。

全我をもつて聞き、全我を挙げて生活し、全我を挙げて説かれたみことばは、また全我をもつて聞かねばならない。他力の信は全身これ耳の世界に開ける。

この尊いみ言だけは誰でも頂戴出来る。善人でも悪人でも、智者でも愚者でも、男でも女でも、ただ平等に聞くことが出来る。しかしそこには、たった一つなくてはならぬ相がある。

出発した水の流れが低きにつくように、み法の水もただ低きについて流れてゆく。合掌恭敬の低きについて流れてゆく。そして一番低い谷の底に底の知れぬ淵が出来る。

愚禿とは低い低い底の知れない深い淵である。今、現に、あふれ出る法の水が一切衆生をうるおしていられる。五体投地してみ教えに信順する衆生を。

頭が高くても得られはするが、手に残つたものは生命の水ではなくて、蟬の脱け殻のような言葉のあくたである。

たとえ、川の中に立つたとて、腰をかがめないでは水は掬むすべない。川の中に立つていつつ、名利の風船玉を追いまわして、生命の水を飲もうとせぬものは誰であるか。起信論に「魔事」が説かれてある。その中に、

「或いは、人をして宿命過古の事を知り、亦未来之事を知り、他心智、弁才無碍を得しめて、能く衆生をして、世間名利の事に貪着せしむ。」

というのがある。悪魔は道を求むる者に、過古や未来のことを知らしめ、弁才演説の小才を得しめて、すぼつと横に名利を求めて走らすと言うのである。

「立板に水」の能弁、泣かしたり、笑わせたり、恐るべし、畏るべし。名利は仏道に非ず。悪魔この人を占領す。

名利を求める者は、名利を与える悪知識が即ち善知識に見え、名利を求めて横に走らんとするを戒める苦き良薬の言葉は、悪魔の声と響く。

名利を与えられて逃げたる人なく、誠られて挨拶もせず逃げた人はあまりにも多い。

されど時に、この苦言を真に合掌して受け取る人がある。必ずこの人の一生を拝すべし。如来のみ心、この人に生きたまうであろう。

み法は、言葉を通して、大地の表を、時代から時代を流れてゆくが、しかしそれだけではなくて、大地の底には教えに相應して信の熔流マクグマが流れている。

大地の底を流れる生命の熔流が、火山のような人格となつて、み法の火を吹いたのが、釈尊や七高僧や聖人であつた。

念仏為本と説かれたのが法然聖人であり、信心正因と領解されたのが聖人であつた。信心とは、底を流れる寿命の熔流であり、称名念仏とは、内なる力が、外に自然に名告り出たものである。

称名念仏こそは、如来の名告りであるまゝが、又同時に如来讚嘆の声である。みことである。

世に如来讚嘆のことば以上の尊いことばはない。如来讚嘆のみことが人生至上のものであることがわかつた時、口を通しての汝の生活は根本から見返される。

聖典のみことばの一つ／＼がみんなご光を放つていられる。みな生きた仏様である。

一字／＼が立ち上つて念仏の我を喚んでいて下さる。

聞かいでもいゝことは、一晚中眠られぬほど本気になつて聞き、言うことの多い中に言うことにこと欠いで、人を迷わせたり、人の間を割きくようなことを言つて回る。

一度だつて自分の言葉に耳を傾けたことのない凡夫の哀れな五十年。み仏はそれを哀れんで、法界唯一絶対のことばを回向して下さる。それがお念仏である。

お念仏の尊さに開く眼が、自分の言葉の上にかけて来て、そらごとたわごとの自我がかすかに知られて来る。